

## 学校が大嫌いな優等生

私は子供の時学校が大嫌いでした。小学校一年生の時、私は母に質問しました。「お母さん、来年も学校に行かなければいけないの?」。この質問を聞き、母は笑い、「もちろん」と言いました。私は勉強のほうはきらいではなかったが、「学校」という場所が嫌いだったのです。

2000代インドに住んでいるアメリカ人はあまりいませんでした。アメリカ人の私がかっこいいと思う人がいましたが、そう思わない人もいました。時々、いじめられたこともありました。「アメリカ人でしょう。インドが嫌いでしょう。帰って」と小学校二年生の少年が私に言いました。これを聞き、私はびっくりしました。「私もインド人でしょう」や「私は友達がたくさんいます。大丈夫です」と思いました。その時私は本当にバカでした。

インドの先生たちは、「左利き」のこともよくわかりませんでした。席の配置（Seating arrangement）をする時、私はよく右に座り、右手で書くパートナーは私の左に座りました。この席の配置のせいで、私のパートナーは私が嫌いでした。左手で書く私は何もすることができませんでした。この時学校が一層嫌いになりました。

小学生四年生の時私は気づきました。私は学校で本当の友達がいませんでした。みんなは私がアメリカから買い、インドに持って来た物だけが好きでした。私の「友達」はよく私を真似をすることもありましたし、無視することもありました。私とその友達に「なぜ無視するの」と聞いたら、彼らは適当なことを言ってきました。それから、みんなは私の背の高さと体重をいじめ始めました。

小学生五年生の時、私は学校に行くことをやめました。一年間毎日母と学校についてけんかしました。母はいじめのこと何も分からず、どうして私が学校が嫌いかわ理解できませんでした。私はよく学校を休みました。その年トータル半年間授業をサボりました。六年生になっても、何も変わりませんでした。毎日母と私は学校についてけんかしました。

それから中学生二年が始まりました。兄は高校卒業し、サンノゼ私立大学に行くために父とアメリカで住み始めました。母と私と学校の関係は変わりませんでした、一ヶ月後突然に私たちの世界が変わりました。私は朝起き、ベッドの右で見たら母は服を折り畳み式（おりたたみしき）していました。「学校の日なのに、どうしてお母さんは起こさなかったの？」と聞きました。すると母は非常にびっくりするのを言いました。父が肝不全で病院にいるということです。兄は朝早く母に電話し、すぐにアメリカに来なければいけないと言いました。

私は信じられませんでした。父が病気になったことではなく、私はインドの学校から逃げるチャンスだと思い、信じられませんでした。「こんなことありえない！」と思いましたが、本当にその夜空港に行き、18時間飛行機に乗り、やっとアメリカに来たのです。

アメリカに来、兄と会い、毎日母は医者と話しました。時々、母と私は父の状態を見に行きました。一ヶ月毎日母は医者と話し、兄は大学に行き、私は待ちました。

アメリカに来てから、一ヶ月後私は中学校に行き始めました。友達がいませんでしたし、父もまた病院にいたし、毎日非常にストレスが多かったですが、私は嬉しかったのです。勉強し始め、母もうれしくなりました。

高校生になり、毎年優等生 (Honor student) になりました。チェスクラブや日本語のクラブなどに入りました。母にもインドのいじめのことを説明することが出来ました。母はそのいじめを聞き、泣き、私の気持ちをきちんとわかってくれました。高校卒業する時、数学の賞 (award for math) とボランティアの賞ももらいました。

学校が大嫌いだった子供は、アメリカで優等生になりました。私は元々勉強することは大好きなので、これから様々なことを勉強したいです。